

◆2021年5月第1週の説教

※説教の最後の方で、3・11の後、小高伝道所の礼拝の灯を守り続けられた一人の教会員の書かれたものを紹介しています。ライブ礼拝にアクセスしていただければと思います。

■日 時：2021年5月2日（日）

■場 所：立川教会

■説教題：「力ある神の子、私たちの主イエス・キリスト」

■聖書：新約 ローマの信徒への手紙 1：1-7（p273）

■讃美歌：6「つくりぬしを賛美します」・364「いのちと愛に満つ」

お早うございます。

本来なら、今日が通常礼拝再開の日でしたが、3回目の緊急事態宣言が出されたため、再開は、解除が予定されている5月11日（火）の翌週、5月16日（日）からに延期いたしました。この日は、礼拝後、2021年度の教会総会も予定されています。健康には十分注意して、お集まりいただければと思います。なお、万が一解除がなされなかった時には、すでにお手紙でお知らせしたように、書面での総会開催と致します。

先週は、金子玲子さんが奨励を担当して下さいました。金子さんは、私が赴任する以前から、役員として、又ジュニア礼拝担当者として、立川教会の大切な働きを支え続けて下さっています。特に、一昨年、大きな手術を受けられた後の奨励でのお話しは、その生も死も全てを神様に委ね切って手術を受けられた信仰の証しでした。そして、聴く私たちに深い感動を呼び起こしたのを忘れられません。

今年度は、私が小高と浪江の両伝道所の代務の任を負ったので、毎月第4週は教会員の皆様の奨励を予定しています。但し、今月の第4週はペンテコステ（聖霊降臨日）礼拝なので、飯田仰先生にお願い致しました。飯田先生は、ご存知のように、私たちの教会の中国語礼拝の通訳として働いておられます。なお、先週私が初めて奉仕した小高伝道所での説教は、来週皆様に事前にお届けする総会議案書と一緒に送るように致します。私がなぜ、小高伝道所と浪江伝道所に遣わされることを願ったかの理由が述べられています。

ところで、先週私が奉仕した午後3時からの小高伝道所の礼拝は、10名の出席者でした。教会員は一人で、残りの9名は他の教会からの応援でした。これから先もこの状態が続くと思います。しかし、小高伝道所の礼拝で、キリストが待っておられます。礼拝の灯が

灯し続けられるようにと。又、今なお時が止まり、閉鎖されたままの浪江伝道所でも、キリストが待っておられます。礼拝の灯が再び灯される日が来ることをです。私は、小高では礼拝の灯を灯し続けるために、浪江では再び礼拝の灯を灯すために、皆様からこの地に送り出されたいと願っています。

さて、約1年をかけてマルコによる福音書を学び終えた私たちは、今年度は、パウロの書いた手紙の中でも最も中心的なローマの信徒への手紙を学びます。パウロが書いた数ある手紙の中で、私がなぜこの手紙を取り上げるのかですが、それは、ご一緒にパウロの復活の信仰を学びたいと思っているからです。パウロにとって、主イエス・キリストの死からの甦りがどのような意味を持っているのか、その問いを常に心に覚えながら学びたいと思います。進め方としては、マルコの時のように、1節1節の全てを取り上げるのではなく、各章から重要と思われる箇所を選びたいと思います。1章では、1節から7節です。

まず1節です。

1：キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、—

手紙の冒頭で、ローマの教会の信徒へ向け、パウロは自分がどのような者であるのかを語ります。自己紹介です。そしてこの冒頭の言葉は、私たちを引き付けます。

パウロは、自分は、「キリスト・イエスの僕」であると表現します。この僕には、奴隷を意味するギリシャ語が使われていますから、自分はイエス様の奴隷であると言うのです。奴隷とは、自分の全存在が主人のもの、生きるも死ぬも主人の手の内にある者です。ですから、パウロは、自分はイエス様のものであると言います。

しかも、良く見ると、イエス様を言い表すのに、イエス・キリストではなく、キリスト・イエスと言っています。即ちイエス様は救い主であると言うより、救い主であるイエス様、メシアであるイエス様と言うように、パウロにとってのイエス様は、何よりも救い主である事実が強調されます。そして自分は、神の福音を宣べ伝えるために、神様から選び出され、使徒とされたと言うのです。

パウロにとって、見ず知らずの、まだ一度も会ったことのないローマの人々です。その人々に知って欲しいのは、自分は、自らが選び取った人生を歩んでいるのではなく、神様

が私を選び出し、召し出され、神様によって差し出された人生を歩んでいることです。そのような歩みとは、まさしく神の御子、イエス様に奴隷として仕える人生です。

続いて、2 節から 3 節、パウロが宣べ伝える福音とは何かが語られます。

2：この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、

3a：御子に関するものです。

聖書とは旧約聖書のことです。福音とは、救い主であるイエス様が私たちに与えられる、そのことは預言者を通してすでに告げられ、約束されていたと言います。

パウロは続けます。

3b：御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、

4：聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。

全き人であり、全き神であるイエス様。その肉による祖先を辿ればダビデ王にまで遡る一方、神の霊によれば、十字架の死と復活によって、神の御子、即ち全き神とされました。

そして 5 節です。

5：わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。

パウロは、神様からの一方的な恵みにより使徒とされています。そしてその恵みは、パウロだけでなく、ローマにいるあなたがたにも注がれていると言うのです。なぜなら、キリスト・イエスによる救いの事実を、神様を知らぬ全ての人々に告知らせ、神様に聴き従う者となるよう働くために、私たちは召され、使徒とされているからです。

まさに 6 節、

6：この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。-

イエス・キリストのものとなる。これが、パウロが僕である自分を表現したことの意味です。イエス・キリストのものとなるとは、イエス・キリストの奴隷となることです。イエス・キリストのためであるなら、死ぬことをも厭わないことです。イエス・キリストを着て、イエス・キリストをこの身にまとして生きることです。生きることもキリストのためであり、死ぬことも又キリストのためであることです。

ここまで来て、私たちにある問いが生まれます。

パウロは、なぜ、ここまで言えるのだろうか。

生きているのもキリストのため、迫害に遭って死ぬことになってもキリストのためであると。パウロは、そこまでして、一体何を、誰に対して、何故、宣べ伝えようとしているのか、との問いが生まれるのです。

そして、この問いは、同時に私たちにも向けられます。

私たちは、なぜ、ここまでして教会に集まり、あるいはオンラインによって礼拝を神様に捧げるのか。

それに対し、パウロは答えます。

7節の祝祷です。

7：神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

即ち、パウロが命懸けで伝えようとしている福音とは、神様とイエス様からの恵みと平和が与えられることです。共に集い、神様に礼拝を捧げる時、あるいは人生の困難な中であって、助けが必要な時、さらには試練のただ中に置かれている時、呼び求めれば、救いが訪れ、振り返れば、恵みと平和が与えられるのです。十字架による罪の贖いと、死を打ち破る復活を信じる信仰、その信仰によって神様に聴き従う者に約束された恵みと平安、これこそが福音であり、この福音を全ての被造物に告げ知らせる者として、パウロも私たちも、神様によって選ばれ、使徒とされているのです。

私は今日の最後に、一人の方の歩みを紹介することによって、この福音の真理が2,000年の時を越えて、今なお輝き続けていることをお話ししたいと思います。

その方は、小高伝道所を3・11以来お一人で守り続けていらっしゃる80歳のご夫人です。東日本大震災からの10年を振り返り、次のような文章を寄せられました。

「東日本大震災から10年」

この方が、小高の教会員となられたのは30歳の時でした。そして、3・11の時はすでに70歳でした。原発によって住む家も土地も奪われ、親戚を転々とし、最後に行き着いたのが娘さんのいるいわきでした。常磐線で1時間以上も離れた町です。

それにもかかわらず、2019年1月、伝道所での礼拝が再開されると、月に一度の礼拝のためにその日は小高に戻り、教会の鍵を開け、椅子を並べ、会堂を掃除し、礼拝後のお茶の準備をし、さらに周辺の草を刈ってまでして礼拝の準備をします。80歳の今もなお、ただ一人です。

私は、この方に、神様に選ばれ、召し出された使徒の姿を見るのです。

教会の扉を開け、御言葉に聴き、礼拝を捧げることの出来る喜びに生きる姿です。

そして、立川教会に集う私たちも又、一人として例外なく、神様に選ばれ、召し出された使徒です。

この1年、私たちは神様に選ばれた使徒として、その使命を担い、それぞれの人生の旅路を歩み通そうではありませんか。祈りましょう。